

2007年4月22日第2回特別礼拝「あなたの敵を愛しなさい」

先日、久しぶりに友人から連絡があった。うちの教会のホームページができたので見てくれとメールを送った返事をくれた。彼はまだ有名ではないが、関西の小劇場の世界では知らない人はいないぐらいの人気者で、今年一年間毎日一人芝居をするという。

そんな彼と、一人芝居のネタになるようなキャラクターということで話が盛り上がった。そこで私は、教会に訪問してこられた方の中でこんな人がいたという話をした。そういう牧師の仕事というのはみんな知らないから、驚く。大変だなあと。

そして彼が言った。そういう人を信じるというのはできるのか？信じて裏切られるのはつらくないか。自分は性悪説だから絶対にできない。牧師というのは裏切られても信じるようにと教えるんだろ、そしてそれを率先して実践しなきゃいかんから大変だなあと言う。

それを聞いて私は、ちょっと違うよと答えた。僕は人間を信じているわけではない、むしろ君よりもずっとずっと悲観的な人間観をもっていると思う。おかしな人がたずねてきて、いつ殺されるか分からんとも思っているし、とにかく人間というのは底知れない罪を抱えている。だから私は人間を信じたことなんてない、自分だって信じられない、疑ってばかりだ。

まあそんなやりとりをしたのだが、その彼が、ホームページに案内されていた今日の説教題を見て言う「お前がこんなことをいうようになるとはな」昔を知っている彼には信じられない、と。そんなこと教えて、実践する、大変だなあ。

「あなたの敵を愛しなさい」今日読んだ聖書テキストに記されている、非常に有名な、キリスト教的愛の戒めです。

あのキング牧師の説教にも「汝の敵を愛せよ」という有名な説教がある。キング牧師といえば、人種差別撤廃運動の指導者として1964年にノーベル平和賞を受賞した、教科書にも出てくる人ですが、彼は説教の中で、その人種問題という根深い問題を解決するためには、憎しみに憎しみで対抗してはならないと言う。憎しみと暴力に屈服してしまっただけで崩壊したこの社会、この古い秩序から世界を救って新しい秩序を打ち立てるために、愛を持って憎しみに対抗せよと言う。そしてこういう風に叫ぶ「我々は最もうらみ重なる敵対者に対し、次のように言う。われわれは苦難を負わせるあなたがたの力に対して、苦難に耐える力をもって対抗させよう。我々を刑務所に放り込むがいい、それでも我々はあなたがたを愛するだろう。我々の家庭に爆弾を投げ、我々の子どもをおどすがいい、それでも我々はなお、あなたがたを愛するだろう。覆面をした暴徒どもを真夜中に我々の社会へ送り込み、我々を打って半殺しにするがいい、それでも我々はなおあなたがたを愛するだろう・・・」

このように「あなたの敵を愛しなさい」というイエスの言葉は、教会の歴史の中で実際に自由を勝ち取る戦いを突き動かしてもきた、そのような非常に強い力をもった言葉

私たちは、この言葉が人間にとって、世界にとって非常に大切なことだということを、理屈め

きで感じるのではないかと思う。すべての人の良心に訴える、普遍的な力を持った言葉だと思う。そしてそのような言葉であるゆえに、反発を覚える方もいるだろう。

そんなことは命令されてできるものではない、という反発もあるだろう。そんなことしていたらストレスがたまって仕方がない、損をするばかりだ。敵と戦えない弱者のいいわけだ。

あるいはこちらの方がもっと多いかもしれないが、私たちというのは、そういう求めに従おうとする時に自分が偽善者になってしまうのではないかという、妙な不安や恐れをも感じるのだと思う。自分はできもしないことに取り組んで、人からやがて偽善者と呼ばれるような、恥を味わうのではないか、そんなことまっぴらだ。

偽善者と言われるのは本当に嫌なもの。昔会社の上司から、自分の娘はキリスト教系の学校に行っているのだが、クリスチャンはみんな偽善者だと言うんだ、困ったもんだなとからかわれたことがあるが、非常に辛かった。恥ずかしかった。でも言われるのは当然。敵を愛せよというような、できそうもないことを大上段から言う訳ですから、言われた方としては言った方のアラを探そうとするに決まっています。そうしたら現実には、そのようなイエスの言葉に生ききれない、そういうクリスチャンばかりなわけですから、偽善者だと言いたくなるのもごもっとも。そういう当たり前のことを当たり前に指摘して溜飲を下げているだけの、大したことない言葉を浴びせられたというだけの話なのですが、やっぱり嫌なんですね。みんなそれが嫌なんですね。偽善者だと言いたがる人は、自分はそうじゃないというところで平安を保っている。恥ずかしくない人間だと。そういう恥ずかしさを引き受ける覚悟がないと、この「敵を愛せよ」というイエスの言葉に向き合うことはできないということはあるわけです。

まあそういう色々な思惑が重なって、私たちは結局、そんなことできっこないというところに落ち着くわけです。多くの方はキング牧師のような特殊な状況にも追い込まれていないし、そんな高い理想に生きていない。そんな風に無理して恥ずかしい思いをしながら生きるより、最初からそんな言葉に耳を傾けない方がいい、それが自然だと。

まあそれで終われたら楽なのですが、でも本当にそれでいいのか、そのことを今日は考えていただきたいという思いがあるのです。この言葉はそのように私たちを追い詰めるだけでしょうか。この言葉に聞いたら損をするというのは本当か。私はそうは思わない。色々な方の経験からしても、この言葉によってその人が恨みや憎しみから解放されて、心の自由さと平安を取り戻した、そんな話がいっぱいある。この言葉は、私たちの現実を本当に幸せにする言葉ではないでしょうか。

改めてよく聞いてみたい「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」。

敵・・・、改めてこの敵ということを考えると、私の敵とはいったい誰だろうかということを感じる。私たちというのは、自分と出会う人のことを非常に簡単に敵にしてしまうことがあると思う。自分でその人のことを敵だと決めてかかってしまって、分かり合う可能性を自分の方から断ってしまう。抵抗勢力なんて言葉を前の総理大臣が乱発していましたが、そういう自分の立場と違う人間を安易に「敵」として、自分の世界から排除しようとする傾向が広まっている

ように思う。自分をかえりみてもそう思う。

広辞苑をひくと、敵とは第一に自分に害をなす者とあるが、まさに「自分に」害をおよぼす、その一点に過敏に反応して、隣人を敵と見なすことしばしばであることも覚えがある。

自分に嫌な思いをさせる、自分をふさわしく扱ってくれない、だから敵。私の思うように動いてくれない、私に迷惑をかける。大きくは外交上の問題から、職場での人間関係、夫婦喧嘩、兄弟げんかにいたるまで、やっていることは同じ。私は昼ごはんにはスパゲッティがどうしても食べたいのに、妻はチャーハンだと言う、だから敵だと。

それは教会の中にだってあること。育ってきた背景の違い、考え方の違い、性格の違い、そういう違いから、自分にとって都合の悪い条件を相手が提示してくる時に、私たちは敵と見なし、臨戦態勢をとる。それは当然といわれれば当然。

でもそこで私たちのなしていることを改めて考えてみると、それは「自分に」害を及ぼすかどうかだけが基準になった、非常に主観的な、自分ばかりが前面にでた判断である、そういうことがしばしばではないか。自分の考えが全面的に正しい、そうやって大した人間でもない自分を絶対視して、相手のことを理解しようという努力をおこたって、相手の考えにもある正しさがあるはずなのに、それを無視する。そして自分への反省ということをすっかり失って、自分はすっかり被害者におさまる。

もちろんまったく理不尽ないじめ、冤罪などはこの限りではない。でも今はそういう特殊な状況ではなくて、私たち一人一人が普段何を行っているかを、批判的に見たいと思うわけ。

エゴイズムから、大切な隣人を敵にしていないか。そういう自分のエゴイズムを顧みもしないで、敵を愛するなんて無理だと、最初から決め込んでいるさもしい人間、それが私たちではないかということを感じさせられる。

そんなことはない、私には敵はいない、誰とでもうまくやっている、そのように言われる方もおられるだろう。でもそれは違うと思う。人を簡単に敵にしてしまうような人ではないとしても、どんな人間ができた人だって敵がいなかったということは絶対にありえない。

それでも自分には敵はいないと思えるのは、その相手のことを考えないで済ませているから。自分のことばかり考えて。敵に対して無関心を決め込んで、私とは違う世界の人間だと、いないことにしてしまう。この人とは分かり合えない、もう面倒だからこれで関係はおしまいとしてしまう。してしまいたい。

まあおしまいにしたくても、なかなかおしまいにはできないから、人間関係というのは複雑なわけですが。でもそのようにして私たちは、自分にとっての敵を、ちゃんと敵だと認めることから逃れて、自分の世界を壊されないことばかり考えている。

こうやって考えてきて、今私は思うのだが、この「無関心」ということ、これが実は今日の御言葉を考える上で、とても大きな問題なのだと思う。

ここでイエスによって一番の問題とされていることは、隣人を簡単に敵とみなして、関係回復をとっととあきらめる、そういう対話をあきらめてしまう無関心、そういう人間の態度ではな

いか。特に現代社会において、このイエス様の言葉を聞くときに、それを考えないといけないと思う。

人間というのはそういうものだ、そのように言ってしまえば楽なのです。性悪説だなんだと言ってですね、人はみんな自分の利益になることしか考えていない、自分もそうだ、だから争いが起こる、でもそれでいいんだと言う訳です。そういう人間同士がとりあえずこの地上で、互いの損得勘定で駆け引きしながら、利用しあって、目を瞑りあうことで何とか平和を保っている、そういう風にして社会は回っていると言われる。そこでは無関心が絶対に必要だと言われるのだと思う。無関心じゃなきゃ、やっていられないと。それぞれエゴイズムにこりかたまっただ同士が、手を取り合っとうまいことやっていくには、きれいな相手とも薄っぺらく付き合わないといけない。深くつつこんで付き合えば争いになるから、薄くやっていくことが大事。そのためには無関心でなきゃいけない。また言ってるね、頭おかしいんじゃない、僕には理解できないね、人種が違うね。そうやってできるだけ関わらずに生きていく、それが人間の知恵だ。そういうことも一面では言えると思う。

しかし、イエス・キリストはそこにメスを入れておられる、そのように思う。誰もがそのように無関心という知恵によって、平和を保ち、心の平安を保とうとしている。しかしそのような偽りの平安、平和、シャロームの中で生きる、それは本当に人間らしいあり方か。そんな冷たい幸せを、薄っぺらな幸せを、考え直してみないかと迫っておられるように思う。

「あなたの敵を愛しなさい」イエス・キリストはそのように言って、隣人を簡単に敵としてしまう、私たちのエゴイズムをゆるさないのです。そしてそういう敵に対する私たちの無関心や、不干涉、かわりの拒絶ということをゆるさないのです。

ここで確認しておきたいことですが、イエスは悪を愛せと言っている訳ではないのです。イエスは悪を絶対にお許しにはならない、むしろ悪に対して一番激しく怒り、敵意を燃やされたのはこの方であることを私たちは見失ってははいけません。

だから私たちが、敵を愛するといいいながら、その人の間違っただ行いを大目に見るのは間違い。もちろん私たちは、何が正しくて何が間違っているかを、絶対的に判断することはできないけれど、聖書に基づいて判断の基準は与えられている。殺す無かれ、姦淫するなかれ、偽証する無かれ、これを犯している私たちの「敵」の罪、悪を問わずに、愛の名のもとに諸手をあげて迎え入れてなあなあで済ましてしまう、それは愛でもなんでもなし、甘やかすし、無責任な態度。子どもの愛し方が分からないと言って、しつけもせずにおもちゃを買い与えてばかりいる親と同じ。そしてそれこそが無関心。

むしろ「敵を愛せよ」とは、「本気でその敵にかかわって、その敵に対して怒れ」。正確にいうならば、その敵をとらえている、その人間を呑み込む罪と悪に怒れ。罪を憎んで人を憎まずなんて言葉もありますけど、その敵のことを本気で愛するがゆえに、その敵の抱えている問題や、罪や悪、それが解決されることを本気で望んで、時には厳しく糾弾し、それと徹底的に戦うのです。そこでは自分に都合がいい、悪いという損得勘定はつきぬけているし、それを超えたと

ころでないと、そういう態度は生まれません。それは徹底的に他者本位の、どこまでもその人に関わろうとする、責任ある態度です。

そしてそれは、その交わり相手が、罪と悪の虚無的な力に呑み込まれることを許さない、責任ある愛です。これこそが、イエスが求めておられる敵を愛する愛だと思ふ。

ヘルレという神学者はこのように言う「愛する者に、あるいは自分に害を与えるものに対する怒りというものを含まないような愛は、愛ではなく、せいぜいやさしさに過ぎないか、最悪の場合には親切を装った無関心であるだろう。」そのような無関心をつきぬけた愛、どこまでも敵と関わり、敵のために祈り続ける愛。

そういう愛に生きることができる人は、また自分自身の抱えている悪や、間違いに対しても、非常に鋭い感覚を養っていかれると思ふ。敵を包む悪に切り込む、その返す刀で自分の罪も切る。自分も同じ過ちに陥っていないか、自分が誰かに対して悪を与えていないか、チェックして悔い改めることができるのだと思ふ。そういう敵に対しても自分に対しても責任ある態度。それが人間らしいあり方であって、責任ある本当の愛のかたちだと、イエス様は教えてくれているように思ふ。

そして私たちは覚えないのですが、そのようにして私たちに決して無関心でいらなかった、責任をもって私たちを愛そうとしてくださったのが、イエス・キリストであり、その父なる神であるのです。

神は私たちに対して決して無関心であろうとしない。それは私たちに魅力があるからではない。関心を示さねばならない理由があるわけではない。むしろ私たちには、神に愛される理由なんてどこを探したって見当たらない。なぜなら私たちは神の敵なのですから。私たちは神の敵なんです、それを忘れないでいただきたい。自分のことばかり考えて、人に迷惑をかけても気付かずにいる。自分が加害者である可能性をすっかり忘れて被害者ヅラばかり。そうやって利用できるものを利用して生きている。温暖化を招いたのも、そうやって地球を食いつぶしてきた私たちです。そんな人間を、神が愛する理由なんてどこにもない。私たちは神から存在を無視されるべき敵なのです。もう関わりたくないと言われてしかるべき。

しかし神は、そういう人間という敵に対して無関心ではられない。私たちにに対して無関心ではられない。かえって敵である私たちを大いなる愛で愛してくださって、その愛において私たちに真剣に怒り、「何をしているんだ」と、「お前はそのままではいけない、もうこれ以上罪と悪にとらえられたままでいてはいけない」と、私たちに関わろうとしてくださったのです。

それはおせっかいな愛かもしれません。私たちは、そのような神からの働きかけを疎ましく思ふ、罪人のままでいることを望む、そういう罪に犯されてもいるものです。でもどれだけ私たちが、神との対話を閉ざそうとしても、決してあきらめることなく、どこまでも関わり続けようとしてくださるのが神の愛です。私たちの罪と悪に真剣に怒り、何とかして私たちを、罪の支配から解放しようと、敵である私たちを愛し続けてくださった。

そしてその神の思いを成し遂げるために、独り子イエス・キリストが十字架にかかってくださった。その十字架の血をもって、その痛みと苦しみをもって、これほどに神の愛は真剣なのだと、示してくださった。愛を拒み、罪にとどまろうとする私たちをなお愛し、私たちの代わりに、私たちのために死んでくださった。そして神のもとへと取り戻そうとしてくださった。それが私たちに示された、イエスの愛であり、神の愛です。

イエス・キリストはそういう方として、私たちにお命じになられます「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」

私たちは、このイエスの愛に撃たれる時、はじめてこの言葉に聞くことができると思う。そしてまた同時に、この言葉に真剣に耳を傾けてみようと思う時、その時はじめて私たちは、敵である私たちを愛してくださったという、神の大いなる愛が、心にしみてくるのだと思う。敵を愛することができない、敵に関わり続けることができない、その私たちの痛みや心辛さを通して、神がどれほどの愛で私たちを愛してくださったのかも分かってくるのだと思う。

敵である者に関わり続けること、それが現代の私たちが失いかけている、正しい人間のイメージであることを覚えます。先日の朝日新聞で、作家の吉岡忍さんが書いておられました「長崎の伊藤一長市長に対する銃撃事件を知った時、とっさに私は、世の中が壊れていくと思った。」そして御自身が持つておられる、世の崩壊、世の終末のイメージをこういう風を書いておられた。「私にはどぎついイメージはない。あるのはもっと淡泊な、あっさりした廃墟の景色である。まずそこは、きらきらと明るいに違いない。人間たちは、自分以外のことは考えたがらない。あれを食べたい、これを着たい、この人が好き、あれもこれもしなくちゃと少し忙しく、少し幸福だ。しかし自分の忙しさや快適さや幸せの邪魔になるものについては、おそろしく不寛容だろう。無視する、キレル、あるいはひょっとして殺すかもしれない。明るくて無知。忙しくて攻撃的。快適で不寛容。幸福で暴力的。そんな人間たちがあふれかえった社会。それが私が思い描く廃墟のイメージである。」そういう廃墟のイメージが、非常に短絡的に暴力に訴えた、あの市長銃撃の事件をきっかけにして、一気に頭に広がったというのですね。

そのような明るい廃墟が、確実に広がっている、そのような思いに誰もが共感していただけると思う。そして吉岡さんがいうように、そういう明るい廃墟は人間の生きる場所ではないのです。そういう廃墟にあって、互いに無関心であることで、薄っぺらな平安を保つ。そんな冷たい、偽りの幸せから私たちを解放するために、イエス・キリストは命じておられるのです。「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」

その愛は、十字架の上からイエス・キリストが注いでくださいます。私たちの内に、キリストが愛を満たしてください。そのキリストの愛を受け入れていただきたいと思います。そしてその愛に圧倒されて、その愛に促されて、明るい廃墟を抜け出していきたいと思います。